

# 国際交流に向けて——中国二大美術学院視察記

田中裕昭（節山）

## 一、中国の二大美術学院

中国を代表する二大美術学院（日本の芸術大学にあたる）と言えば、北京の中央美術学院（一九一八年創設）と、杭州の浙江美術学院（一九二八年創設）である。書法班は従来ともに国画系（中国画学科）の中に設置されていた。そのうち浙江美術学院は、一九九三年に校名を「中国美術学院」に変更し、さらに二〇〇一年四月に国画系の中から独立した「書法系」が設置された。すなわち新しい教育組織の中で、書法教育がスタートしたばかりである。これは所謂「改組転換」であり、大学教育の中で国内外ともに書道を重視しはじめた現象と受けとめることができよう。

この二大美術学院に、日本から今までに多くの学生が留学している。大東文化大学からも、かなりの卒業生や在学生在が進学、留学し、中国語を通じて、書法、篆刻、中国画および書法史、書法理論を学んできた。中国政府奨学金進修生として二大美術学院に進学、留学した優秀な学生も数名おり、本年も進学、留学を希望する在校生がいる現状である。

## 二、書道学科の海外短期研修

書道学科がスタートして二年目が過ぎようとしている。関係各位のご協力により、開設前に設計したカリキュラムが順調に展開し、「書道学」の様々な分野の研究が始まった。あと二ヶ月ほどで板橋校舎に新三年生がやってくる。ゼミの開講もすぐである。

三年次に開講を予定している講座がいくつかあるが、なかでも「書道文化演習Ⅱ（海外）」は、学生諸君が実際に海外研修に出かけ、現地の大学が大東文化大学書道学科のために、特別にプログラミングしてくれる書道関係の授業を受講してもらおうと計画したものである。

そこで、この二大美術学院での海外研修を目指し、準備を進めてきた。一昨年七月、河内利治助教授が下準備のために視察に赴き、そして昨年九月、研修先の選定と協定に向けて、私と河内助教授が一緒に訪中した。以下はその視察記である。

### 三、中国美術学院の校舎と教授陣

かつて私が訪問した時の校舎は、浙江省杭州市の西湖のほとり、南山路にあった。しかし今回は、校舎改築のためすべて取り壊され、二年後の完成に向けて新築中であった。先生はじめ長期留学生は、毎日バスで三十分ほど揺られ、錢塘江を渡った蕭山市にある附属中学の校舎で学んでいるという。時間の関係でそちらのキャンパスを視察できなかったが、大東大の短期研修は、旧校舎に隣接する国際培訓中心の建物（賓館）で実施することができる。

中国美術学院は、一九八〇年に長期留学生の受け入れを開始した。もう今から二十年以上も前になる。この間、ずっと海外から留学生を受け入れてきた素晴らしい伝統を持つ。河内助教授もその二期生として、一九八一年から八三年まで留学した。彼の恩師や同窓が今、教壇に立っていることは、非常に心強く有難いことである。

現在の書法系の教授陣は、日本の書道界でも著名な先生方がそろっている。劉江（西泠印社副社長・終身教授）、朱関田（浙江省書法家協会主席・兼任教授）、王冬齡（博士指導教授）、祝遂之（主任教授）、任道斌（国際培訓部主任・教授）、蔣進（副教授）ほかである。

北京の中央美術学院が、やや中国画の色彩の濃い書法に比較すると、中国美術学院の書法系の方が、伝統の中での書法を發展させていると強く感じた。

### 四、中国美術学院の留学生楼

外国人の長期留学生は現在、杭州市内の中山路にある学生寮に住んでいる。短期研修ではこの寮を使わず、南山路にある国際培訓中心の建物（賓館）に宿泊するが、折角なので、今の学生の生活ぶりを見せてもらった。ちょうど新学期を迎え、留学生が入寮手続中で、私たちが訪れた外事弁公室には、次から次へと新入生がやって来た。日本からの留学生が非常に多いのに先ず驚いた。

さらに驚いたのは、かつて河内助教授が留学した折、日常生活から中国語の指導までお世話になった、宋学善老師が外事弁公室主任として、昨年から再び着任されていたことである。二人の再会は二十年ぶり、涙の対面となったが、温厚で篤実な宋老師が、新しい留学生に今も優しく様々な質問に対応されていた。聞けば、宋老師はいったん定年で離任されたが、学院からの強い要望で再任されたそうである。この先生が主任ならば、留学生は安心して就学できる。そんなうれしい実感をもって宋老師と別れた。

## 五、杭州周辺の書道史跡

杭州の街は、大きく様変わりした。近代化の波は街の大半を生まれ変らせていた。しかし、西湖周辺には古い歴史の香りが漂っている。なかでも孤山には、清代の文人呉昌碩が初代社長となった西泠印社がある。境内に建った印学博物館は近年整備され、印学、篆刻学、金石学においては実に充実しており、歴史上の名印の大半が収蔵されている。陳列には趣向が凝らされ、劉江先生ご自身の設計の展示と聞く。特別にお元氣な劉先生から、一つ一つ作品解説を賜った。近代中国書道史を知る上で、生きた教材の宝庫と言えよう。

その他、紹興に赴けば、王羲之ゆかりの蘭亭、魯迅旧居と博物館などがある。さらに足を延ばせば、上海、蘇州、揚州や太湖付近にも明清時代の史跡がある。学生たちに人気の場所ばかりである。

## 六、中央美術学院の新校舎

北京の中央美術学院は、昨年（二〇〇一）七月まで、校舎は四環路の外、留学生楼は繁華街の王府井にあったが、新校舎が完成したのに伴い、九月から正式に全て移転した。新校舎は、北京空港からほど近く、広大な面積に威容を誇る壮観な近代建築であった。私たちが視察した日は、ちょうど留学生や中国学生のガイダンス日であった。国画系主任の王鏞教授、邱振中教授と外事弁公室の朱竹主任と面会し、新校舎やゲストルームを見て回った。留学生寮も中国学生の寮も、実に恵まれた施設であった。

## 七、北京の書道史跡

北京には、故宮博物院があり、天安門前の中国歴史博物館、五塔寺の石刻博物館、孔子廟の首都博物館、北海公園の三希堂法帖原石等々、書道史跡には事欠かない。図書館も近代的な国家図書館がある。筆墨硯紙の揃う琉璃廠があり、学生に不便はない。問題は新校舎と市街区が離れていて、資料蒐集や用具用材の購入には不便であり、物価も高い。

## 八、覚書の締結へ

書道学科では、視察後の九月中旬に直ぐに協議をした。指導スタッフ、カリキュラム、周辺の環境、経費、時期、期間等を考え、海外短期研修は、毎年夏休み中の九月上旬に行うこととし、その対象校として、先ず中国美術学院において実施する方針を

決めた。その後、国際培訓部と協議しながら、両校の「覚書(案)」を作成した。

正式には「大東文化大学と中国美術学院との書画短期研修に関する覚書(案)」という。主旨は、「中国美術学院は、大東文化大学文学部書道学科が主催する〈書道文化演習2(海外)〉に参加する大東文化大学の学生のために、〈書画短期研修〉を提供することに同意し、国際培訓部が実施の責任を負う。」である。

この原案が十二月の文学部教授会、一月の大学評議会、理事会で承認され、正式に「覚書」締結の運びとなる予定である。「書道文化演習2(海外)」の科目担当教員は河内助教授であり、四月以降に経費、カリキュラム、日程等を調整し、九月には最初の学生が二十名、訪中する予定である。

## 九、国際交流に向けて

両校の「覚書」には、当該科目「書道文化演習2(海外)」に止まらず、いくつかの将来計画が盛り込まれた。それは、「今後、両校は協力して友好関係を継続し、教員の交流、学術研究や展覧会の交流、および長期留学生の交流を促進する。さらに両校は姉妹校締結に向けて努力する。」である。

これによって、教員相互の交流をはじめ、両校の学生による書道作品展示による交流と学術的交流や、相互の学生の長期留学による単位互換の制度化などを推進して、姉妹校関係を締結できる基礎が固まった。

このような大学間の国際交流は、他大学のみならず、本学においても種々推進されているが、書道学科もようやく第一歩を踏み出したと言える。

これによって、近い将来、日中の書道文化の交流に少しでも貢献できる人材が輩出することを目指している。